23年の回顧

MEMOIR OF TWENTY THREE YEARS

澤田 彰 逸*

AKIHAYA

SAWADA

昭和5年機械技術屋として学校を巣立つた私であり、而も熱機関に興味を持っていた私が既に23年半に及び非鉄金属の圧延加工の業務に従事して来たことは、何かの因縁があつたのであろう。

在学中に当時の此の道の権威後藤教授の講義を聞きながら試験前にひどい腹痛をしてるに試験も受けなかつたので遂に単位も取らないで卒業し又加茂教授が機械工学の発達が遅れるのは冶金が頭が悪いのだと云われたのを聞いてそんなものだと思つていた私である。会社に入つてから何莫機械屋に負けるものかと頑張つて来たが最近外国の新鋭機器が導入され其の高級部品材料が要請されると矢張り吾々が悪いのかとも反省し又他方では日本で良い計測器、熱管理機器、自動制御方式等の発達の遅れが吾々の事業をして此の窮地に陥れたかとも考えて見たりしている。

所で今何か新しい計画をやろうとすると、あれもない、ないものづくめである。何かと云えば直ぐ輸入せねばならぬ日本の経済状況は、特殊の婦人が身を粉にしてかせいだりで海外から輸入せねば世界の水準に伍して行かないかと涙が出る思いである。

然しいたずらにくよくよしても際限がない。結局は工業技術の発展は全工業の水準が平均に上らなければ駄目だと痛感して矢張り自分のやつている仕事を高水準に持つて行く他はないと結論した次である。

私が入社した当時の住友伸銅鋼管(株)はデュラルミン(17S)を月にせいぜい5~10屯程度造つていた。昭和7年頃からマグネシウム合金が要請され資源的にも国内から得られると云う訳で所謂エレクトロン板の圧延を研究

させられた。電気炉の配電盤が悪い為に3屯許りを炉の中で灰にしたことも思い出される。住友銀板として写真製版用エレクトロン板が住友から売出されたのは此の当時であつた。五十嵐教授(元住友金属技師長)が伸銅所の研究室に居られたのでうるさい程室を訪れたものである。

上海事変のあつた頃には日本製飛行機の骨は軽合金か、特殊鋼か即ち英国流か独逸流かの岐路に迷つていたのではないであらうか。現場の技術者としての私は特殊鋼板の圧延迄やられた。

其の後超デュラルミンが松田博士(元住友金属専務)により発明され又現在の24Sが大量に飛行機に用いられるようになり続いて五十嵐博士により超々デュラルミンESD(75S)が発明されるや伸銅所の仕事は繁忙を加え昭和14年に現在の名古屋の伸銅所の位置に軽合金専門の工場が建設されることになつた。富士伸銅の佐藤さんが鋳造鋳物、東洋アルミの川島さんが管棒で、私が製板で選ばれて名古屋に転勤し丸山さん(現中央電気工業社長)故郷田さんの指導で遷二無二名古屋軽合金製造所の発展拡大に勉めた積である。及ばずながら昭和19年9月には3,000屯の製品を出したことは当時としては快哉を叫んだものだ。

終戦後は松田専務が当時の所長として空襲の痛手にあえぐ此の工場を既倒に帰す為に奮闘され其の下で今日の伸銅所に漸くたどりついた。

昭和25年春選ばれて米国、加奈陀の伸銅輕圧の事業を戦後初めての渡航者として視察させていただいたが、見る物聞くこと、まるで雲と泥との差異である。然しながらナポレオンは花の巴里で唯眩惑されていなかった。其の後沢山の渡航者もいられる。貴重な弗を使つた以上は其の価値以上のものを奉公しなければならない。私は科学を生かすことだと思ふ。日本の科学技術者は理論的に正しい良い技術を細大なく活用することが急務であると考えるのである。

今日我々が一番考えねばならぬことは、如何にして8千有余万の人口を養つて行くかの問題であると思ふ。国産食料が足りないから輸入しなければならぬ。その為には工業製品、水産品等で不足をカバーせねばならぬことは贅言を要しないと思ふ。資源の活用が急務である。豊富な水力と人力との活用が急務である。発電所の建設材料を安価に造らねばならぬ。セメントを焼く為の石炭を機械を造る為の鉄を銅を、これを現地に運ぶ輸送機械等々を安くせねばならぬ。人件費を安くする為には生活費の大部分を占める食生活を營養化し簡素化せねばならぬ総てが転廻である。

結局日本の総合科学、農業、水産、工業全部門が同一水準に高度化されねばならぬ。政党政派学閥にとらわれている時ではない。良悪正邪を明にして国民全部が良い日本を造り上げる為に一步一步前進しなければならぬ秋であると思ふ。

* 住友金属工業株式会社伸銅所取締役伸銅所長